

聲コソ聞ユレ此人ニハ居アハジト思フ物ヲトテ示退散之由云々御心地即平愈

〔十訓抄七〕小野右大臣實藤原とて世には賢人右府と申若くより思はれけるは身に勝たる才能

なければ何事に付ても其徳顯れがたし試に賢人を立て名を得る事をこひねがひて一筋に廉潔の振舞をぞし給けるか、れども人更に不許かへりて嘲る類も有程にあたらしく家を造て移徙せられける夜火鉢なる火のみすのへりに走りかゝりけるがやがても消ざりけるを、まばし見給けるほどにやうくとゆづり付て次第にもえあがるを人あざみてよりけるを制てけさゝりけり火大になりける時笛計を取て車よせよとて出給にけり聊物をも取ける事なし、是より自賢者の名顯て帝より始奉りて事外に感じてもてなされけりかゝるに付ては、げにも家一やけん事彼殿の身には數にもあらざりけんかし或人後に其故を尋奉りければ、わづかなる走り火のおもはざるにもえあがるたゞごとにあらず天の授る災也人力にて是をきはは、是より大なる身の大事出くべし何によりてか強に家一を惜むにたらんとぞいはれける、其後事にふれてかやうの振舞絶ざりければ遂に賢人といはれてやみにけり、のちさまには鬼神の所變なども見顯されけるとかや好正直與不廻而精誠通於神明と曹大家が東征賦に書ル、今思合せられていみじか、ればとて賤しからんたぐひ此まねをすべきにあらね共程に付て賢の道ひとしからん事をおもへと也此殿若くより賢人の一筋のみならず思慮のことに深く情人に勝れておはしけり

〔古今著聞集文學〕前途程遠馳思於鴈山之夕雲後會期遙霏縷於鴻臚之曉淚と後江相公大江朝綱が書たるを渤海の人感涙をながしけるのちに本朝人にあひて江相公三公の位にのぼれりやと問けり、まからざるよし答ければ、日本國は賢才をもちゐる國にはあらざりけるとぞはぢしめける